

## 2019 年度 入学試験問題

# 作文

## (グローバル入試)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入しなさい。QRコードシールをはる必要はありません。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



○次の文章は、第四十回「少年の主張」愛知県大会の最優秀賞受賞作品です。全体をよく読んで、あなたが感じたことを自由に書きなさい。字数は自由です。

「私、ストレスになってるダヨ。」

母は、片言の日本語でぶつくさ言う。

僕は、日本人の父と、フィリピン人の母の間に生まれました。母は、日本語があまりうまく話せません。使いこなせる言葉は、タガログ語と英語です。父は、日本に住む以上、僕が言葉で困らないように、家では日本語で接するようにしていました。母も忙しい中、勉強をしています。そう簡単に身につくものではありません。そのせいで、幼い頃の僕は、片言の日本語しか話せず、幼稚園では、トラブルがよく起こりました。

それを心配した母は、息子に十分な日本語を与えてやれない分、代わりに英語を教えようとしてくれました。でも、小学校で片言から自然と卒業していった僕は、生活の中で英語の必要性を感じることはなく、母の英語のレッスンを怠けるようになりました。母との会話も日本語で行い、不自由はないと僕の中では思っていたのです。

ところが、中学校に入ってから、母との衝突が増えました。母が片言の日本語で話してくると、イライラして、咄嗟に「はあ？」と言ってしまふようになったのです。母が心配そうに聞いてきても、相談したところで、すっきりした言葉は返ってこないだろうと、

「もう、関係ないでしょ。ほっといてくれ。」

ときつい口調になります。そんな時に限って、

「なんで怒ってるの？」

と、母も食いついてくるのです。おそらくどの家庭でも起こる反抗期ならではの親子喧嘩です。でも、我が家は違います。言葉の行き違いで、大きな揉め事に発展してしまうのです。おかしなボケに対してつつこむだけでも、母は馬鹿にされたと感じてしまふし、父や僕が母にアドバイスをしたつもりでも、母は怒られたと感じてしまいます。母の片言の日本語に、僕はうんざりしてしまい、しだいに言葉遣いが悪くなり、母に理解できない言葉で怒鳴ることもありました。いつしか心はすれ違い、埋められない言葉の壁、心の壁が僕と母の間に立ちふさがりました。そして、「私、日本人じゃないダヨ」という言葉が、母の口癖になったのです。

中学二年生の自然教室で、母から手紙をもらいました。僕はそこで初めて、母の思いを知りました。同じ家に住む家族なのに、言葉が通じないという現実。母親としての葛藤、苦悩。僕がフィリピンで会話に苦労するのと同じように、母は毎日それに苦しめられていたのです。フィリピンの家族は、僕のことを温かく受け入れてくれました。なのに、母にとって一番そばにいて、一番分かってほしい相手である僕は、母を拒否していたのです。そのことに気づいた時、申し訳なさに涙がこみ上げました。そして、がむしゃらに母への思いを手紙に綴りました。英語やタガログ語も混ぜながら、漢字にはふりがなをつけて…。母を思いやる気持ちと、今までの感謝の気持ち

を、僕にできる精一杯の形で表したかったのです。

手紙を読んだ母は、強くハグをしてくれました。今では、母と僕で、英語と日本語の交換をし、互いに得をしています。

言葉は、ただ単に通じればよいのではなく、思いを伝えよう、思いを汲もうとする気持ちがないければ、同じ言語を話せたとしても分かり合えません。現に母は、日本語が堪能ではないにも関わらず、たくさんの友達に囲まれ、明るく生活しています。それは、日本人、外国人などの区別なく、心優しく受け入れてくれる人たちがいるからでしょう。

僕は将来、人と人をつなぐために、言葉の壁を壊せる人になりたいです。国際化社会が進み、僕のように、母国語の習得に悩む子どもも増えてくるでしょう。それに、違う文化をもつ人が生活することは、苦勞も多いはずですが、そういった人たちを支える活動や仕事ができるように、少しでも語学力をつけ、いろいろな人と接し、自分を磨いていきたいです。

〔思いやりは言葉を超える〕豊田市立井郷中学校3年 富田真亜玖

(問題は前のページで終わり)







